

「私」という色の創造

彼女はまさに生きるアートだ。毛先は淡い赤色に染まり、腕や首元にはタトゥーが刻み込まれ、そのタトゥーの絵からは彼女の生きざまがひしひしと感じられる。化粧も濃く、鼻にはピアスが輝き、手先も鮮やかに彩られている。これらの容姿から、あなたは近寄りたがたい「ギャル」を連想するのではないだろうか。私も同様であった。彼女という「人間」に触れるまでは…。

彼女と出会ったのは、2011年3月11日の東日本大震災の数日後であった。震災後、日常の景色が崩れ、人びとの表情からは笑顔が消え去っていた。そんな非日常と直面した自分は、沈んだ気持ちに活を入れようと義務的にYouTubeで音楽を探した。私にとって生きるエネルギーの一部である音楽を、無意識に身体に流し込む。しかし、どうもその音楽も当時の自分にはエネルギーとはならず、身体を逆流していく。実に不愉快な気分だった。何か心の拠り所となる音楽はないかとYouTubeを漁っていると一人の女性が目についた。彼女の名は「JASMINE」。現代において、「まさにギャルだ」と一言で括られてもおかしくないような出で立ちの彼女の音楽を試しに聴いてみようか。そんな私の軽率で、差別的な態度とは裏腹に、彼女の歌声を耳にした瞬間、目の奥がじわっと熱くなるのが分かった。この心地よさは何だろうか。彼女の力強い歌詞が乾燥した心に潤いを与え、優しい歌声が心の壁をそっと取り払い、温かく包み込んでくれた。そのとき私は、非日常のなかで生きる希望に出会えた気がした。

幼い頃、彼女は両親の離婚を経験している。大切な人との別れを経験した彼女が抱える「傷」は心の奥深くを抉り、癒えるまでの道のりは長い。しかし、彼女はその「傷」の痛みに寄り添い、彼女の「生き方」や「容姿」、そして彼女の「音楽」の一つ一つを作り上げてきた。だからこそ、人の心に沁みわたる「音楽」を生み出すことが出来るのだろう。また、一方的に色を与えられ、同じ色に染まる社会の中で、彼女は自分自身で色を作り上げていくという人生を歩んでいる。それがJASMINEという唯一無二の存在、個性を表現する方法であり、変化していくアートの根源となっている。

それからというもの、私はJASMINEという人間に惹かれ、日常のなかで心が汚れ、自分自身と向き合うことが億劫になるたびに、彼女のLIVEへ足を運ぶようになった。彼女は自身のLIVEで、生い立ちや悩み、ファンの一人一人を想い、音楽を作り上げていることなど、赤裸々に語ってくれる。まるで、ファンを親友のように思い、他愛もない会話をしているかのようだ。そんなユーモアに溢れる彼女に触れることで、また一から歩み出す力が生まれる。

「余暇」というものは、自分の心に深呼吸をさせるものではないだろうか。心に新鮮な空気を与え、不要物を取り除いていく感覚である。その心地よさが、鼓動をさらに加速させる。このように生きる上で必要不可欠である「余暇」が、私にとってJASMINEという「人間」の生き方や彼女から生み出される「音楽」である。「余暇」が自分自身を成長させ、人間らしさを与えてくれる。私はJASMINEという存在から、あなたはあなたの「余暇」から、あなたらしさが創造される。これからも「余暇」を通して、自分という存在に色を付け加え、生きるアートとして人生を彩っていきたい。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出7本!!

「じゃわめぐ」ねぶた祭り

青森県民の私にとって夏といえば、ねぶた祭り、それ以外はない。ねぶた祭りは毎年8月1日から7日まで開催される。2歳のときに青森市に引っ越してきた私は、物心ついたときから毎年欠かさず見に行っていた。その経験の中でも最も心に残っているのは、高校生のときに、ハネトとして祭りに参加したときのことである。

ねぶた祭りは、ねぶた師が1年かけて作り上げる巨大なねぶたと、祭りの音楽を奏でる囃子、そして色とりどりの衣装に身を包み一心不乱に踊る、ハネトという3つが合わせられて作られる。私にとって、はねとはほぼ初めての経験だった。親や友人と見に行くことはあっても、実際に参加する機会はなかったのである。

あの日は、高校の夏季講習の真最中であった。私は初めて祭りに友達と当事者として参加することをとても楽しみにしていた。だから、授業は半分以上聞いていなかったし、最後の時間のチャイムが鳴る10分前には、失礼ながら帰る準備を済ませていた。友達と待ち合わせする時間を決めてすぐに家に帰った。ハネトとしての1日は長いのである。まずは浴衣型の衣装を着なければならない。若い人は浴衣の丈を膝あたりまでに短くし、中に着る肌着をカラフルなものにし、裾から少し見せるのが流行である。そして、なんととっても鈴をつけなければならない。ハネトは跳ねて踊る人たちのことを言う。跳ねたときに「シャンシャン」と鈴の音になるように浴衣にたくさんの鈴をつけるのが習わしなのである。

着付けが終わり、衣装に身を包んだ私は待ちきれず、すぐに待ち合わせ場所に向かった。会場はすでに人々の高揚感と熱気に包まれていた。私達もハネトの波に入り、祭りの開始を待った。数分後、開始の合図である花火が打ち上げられた。それと同時に聞きなれた囃子の音が始まる。最初の3小節で奏でられる、笛、鐘、太鼓の音に私の心はざわついた。青森には「じゃわめぐ」という言葉がある。津軽弁で「血が騒ぐ」という意味であり、青森県民のねぶたの囃子を聞くと何とも言えない胸の高鳴りや、踊りだしてしまいそうな高揚感を示す言葉である。まさにあのときの私は「じゃわめぐ」という感覚であった。囃子が始まると、跳人達が「らっせーらー」という掛け声とともに一斉に踊り出す。友達も、知らない人も子どもも大人も、皆心をついて、その時ばかりは嫌なことも全て忘れて踊る。はねとの盛り上がりや一体感、そして、祭りの魂を揺さぶられるような感覚は実際に参加しないと体験できないものであった。

青森にとって、ねぶた祭りは欠かせないものである。青森の冬は長く厳しい。一方で、夏は短く一瞬だ。半年近い冬を越え訪れる、その一瞬の夏に人々は全ての情熱をかける。あの日だけは、ねぶた師も囃子を奏でる人も、見ず知らずの観光客もみんな心をついてくれる。衣装を着て、祭りを盛り上げる当事者として参加したことで、祭りを見ているだけでは感じることの出来ない一体感と津軽人としての「じゃわめぐ」感覚を感じることができた。祭りが終われば人々はもとの生活に戻る。冬に向けての準備が始まる。少し寂しい気もするが、あの一瞬に命をかける人々の姿に美しさも感じた。

大学に入学してからテスト期間と重なり、一度もねぶたに参加できていない。留学へ行く前に日本人として、津軽人としてあの感覚をもう一度味わいたい。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出7本!!

おばあちゃんが死んだ日

今から8年前、中学校1年生の初夏に祖母が亡くなった。最後のお別れをする為に私たち家族は祖母が暮らしていた宮古島へすぐに向かった。島へ行くのは3、4年ぶり、とても久しぶりであるように感じた。祖母が亡くなったということ、言い換えると人が死ぬということはまだよく理解できなかった私は、薄情なことに久しぶりに訪れる宮古島に少しワクワクさえしていた。幼い頃は毎年夏が来ると宮古島へ行くことが私たち姉妹の楽しみであった。夏の宮古島は美しかった。毎年祖母にはよく遊んでもらっていたし、私は祖母が大好きであった、と思う。しかし私は葬儀中も、火葬を見届けている間も、不思議と悲しいという感情は湧いてこなかった。人が1人、それも大切な人がこの世界から消えてしまうと言うことは、もう二度と会えないということは、当然のように悲しいことだ。もしかすると私はとても薄情な人間なのかもしれない。私がある日何を感じて何を考えたのか、それを私のオンリーワンの余暇として書いてみようと思う。

葬儀は曾祖母の家で行われた。8年も前のことで記憶は断片的であるが、その日は夏らしく良い天気でもとても気持ちよかったことをよく覚えている。太陽が眩しかった。私は中学校の制服を着て、死化粧を施し白い箱に入った祖母とお別れをした。手を握ると冷たくて、生きていない人は冷たくなるのだと初めて知った。目を閉じたままの祖母が少し怖かった。式には沢山の人がやってきた。皆悲しい顔をしていた。母がこんなにも涙を流しているのを初めて見た。私は悲しい顔をしていただろうか。ただ、母は祖母が大好きだったのだな、と淡々と思った。しばらくするとその場の空気が嫌になって、私は外に出た。庭には昔使われていた井戸、馬小屋、豚小屋があり、私は何となく屋根に登って寝転がった。今思えば、空に行ってしまったかもしれない祖母と近い場所に行きたいと思ったのかもしれない。しかし美談にしたい訳ではないので、その当時の私は本当に何となく何も考えずそこに登ったのだということは書いておこうと思う。隣の建物の中では沢山の人が悲しい顔をしているのに、空は綺麗で大きな入道雲を浮かべ晴れ渡り、なんて対照的なのだろうと思った。晴れやかでも悲しいでもない私はどっちつかずで、中途半端だった。屋根に寝転がりながらぼんやり、祖母との思い出を振り返った。ご飯が美味しかったとか、変な所に拘りがあったとか、お風呂上がりにベビーパウダーをつけることを強要されたとか、入院中お見舞いに行くといつも笑っていたなとか、様々なことを思い出して、もう祖母には会えないのだな、とただそう思った。私は薄情な人間なのかもしれない。

当時の私は、自分以外の皆が悲しんでいるのに私自身はそうでなかったとしても、それを疑問に思うことはなかった。しかし歳を重ね日々を行きっていくうち、祖母の死を悲しめなかった私はもしかするととても冷淡で、薄情で、無慈悲な人間なのかもしれないと思うようになった。しかしきっと、誰もそのことを責めることは出来ないのだと思う。人の感情はその人だけのものであり、何かに対してわき起る感情はそれを表に出さない限りは社会的にだって正解、不正解など決めることはできないのだから。だから私が祖母の葬儀の日に悲しくなかったことも、やっぱり夏の宮古島は美しいと思ったことも、晴れた空を見てのどかだなどと思ったことも、それが非情だろうと何だろうと、私だけの感情なのだろうと思う。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出7本!!

向き合う時間

人生の中で、ネット社会から離れあれだけ自分と相手と真剣に向き合えた時間はそうないだろう。今年、私は船に乗って240人の仲間と共にインド、スリランカに向かった。日本に戻るまでの一ヶ月間、ネット環境から遮断された環境で過ごした。この一ヶ月間の経験は、私の人生において、本当にかげがえのない時間であり、一瞬の出来事であったと感じる。

私は1月18日から3月1日まで、内閣府が主催する「Ship for world youth leaders (SWY)」に参加した。船の旅というと、ピースボートが有名であるが、SWYは日本人青年120人、外国人青年120人が船という同じ空間でディスカッション、セミナー受講、プレゼンテーションを行う。これらの活動を通して世界に通用する人材を育成することがこの事業の目的である。今回外国人青年は、オーストラリア、ニュージーランド、メキシコ、チリ、インド、スリランカ、タンザニア、バーレーン、UAE、ロシアの10カ国の青年が参加した。今までの人生では、全く関わりのなかった国の青年と過ごす日々は、驚きの連続であり、同時に自分を見つめ直す日々でもあった。

乗船した数日間、私は逃げ場のない環境に慣れず、自分の殻に閉じこもっていた。外に出ても海に囲まれている現実に、自分の小ささを痛いほど感じた。そんな数日間が過ぎ、私の中である疑問が生まれた。「何のために来たんだろう。」このまま過ごしていたら、参加した意味がないと、やっと気づいたのだった。そこからの私は「分からない自分」を武器にした。他の参加青年より知識が少ないことを実感したからこそ、何でも吸収することができると思った。一生に一度しか参加できないこの事業を全うするために、たくさん話して、学んで、遊んだ。何でも全力でやると、自分が見えてなかったことが見えてきた。自分が自分で壁を作っていたことが分かった。くだらない話も深い話も、自分を出さずに話すことはできない。素の自分を出せる仲間に出会えたこと、それだけでここに参加した意味を見出すことができると思う。

下船の日は人生で一番泣いた日だった。振り返ってみると、まさか自分がこんなに泣くとは思っていなかった。正直、乗船の時には行きたくないと思っていたくらいで、一ヶ月間という期間に嫌気がさしていた。しかし、自分の気持ちひとつで見える景色も、出来事も変わった。中身のない長かった一日が濃密な一瞬になった。私はこの事業に参加して、人との出会いが人生をつくるということを体感した。スマートフォンの画面と向き合う時間が、人と、自分と向き合う時間になり、同じ時に同じ体験をすることで、仲間と呼べる関係になれること、現代社会では出来ない経験をしたと言っても過言ではない。

人間は、国が違うから違うということではない。全て違う人間であり、同時に同じ人間である。綺麗な部分も、汚い部分も、完全な理解は出来なくて良いのだと思う。しかし自分を受け入れ、相手を受け入れることは、たとえ時間がかかったとしても、世界に通ずるリーダーだけではなく、全員に必要なことである。船旅の中で人間の小ささを実感し、自分と相手と向き合う時間を得られたことで出た、私なりの答えだ。スマートフォンと向き合えば答えがすぐに分かる現代、自由な余暇の時間こそ、生身の人間と向き合うことで、自分のなりの答えが出せるのではないだろうか。そして、全力で向き合ったからこそ、自分にとって、かけがえのないものとなるのではないだろうか。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出7本!!

憩いの場所

私はカフェが好きだ。何かあるといつもカフェに行く。特別、コーヒーが好きというわけでもない。好きか嫌いかと言われれば、もちろん好きだが、それよりもカフェという空間が好きなのだ。コーヒー豆の香り、ゆったりと流れる音楽、少し薄暗い空間。どんなにせわしない日々を送っていたとしても、店に入れば急いでいる人はいない。ゆっくりと流れる時間の中で、たまたま居合わせた客たちが、それぞれの時を過ごしている。あの空間が好きでたまらない。

カフェに通い始めたのはいつからだったろうか。確か高校生のころ、受験勉強をするために通いだしたのが始まりだろう。それから何かある度に、いや特に用事がなくてもカフェに通っている。読書をしたいとき、勉強しなければならないとき、仕事があるとき、計画をたてる時、悩みがあるとき、友人と話したいとき、私は決まってカフェに行く。とりわけ、一人でぼーっとしたいときにふらっとカフェに立ち寄ることが多い。特に何をするわけでもない。

思い返してみると、私の人生の転換期は、カフェから始まることが多い。なぜなら、カフェで頭の整理をするところが多いからなのだが、あの場所で物事を考えると思考がスッキリする。カフェに行くときは必ずノートとペンを持っていく。そして悩みを書き出す。この先の進路をどうするべきか、あの話を相手に言うべきか否か、そんな私にとっては人生の一大事といえるイベントの数々は、カフェで決断が下されている。私は、もとより優柔不断である。物事を決断するのも、相手に何か伝えるもの一苦労なのだ。だからこそ、悩む時間と場所を決める。大抵その時間と場所というのは、カフェに入ってから出るまでの間なのだが、一步店から出たら、それ以上同じことで悩まないようにしている。

カフェの使い方が人それぞれ違うように、カフェが好き理由も人それぞれだろう。自分でも不思議に思うが、私はカフェにいる人間が好きだ。特に、個人でいればいるほどいい。私は、9割方1人でカフェに行く。そしてなるべく端で、店内全体を見渡せる席を選ぶ。課題に取りかかる前、読書を始める前、考え事を始める前、ざっと店内を見渡す。最近ではノマドワーカーのブームは去り、個人でパソコン片手に仕事をする人の存在は珍しくはなくなった。パソコンに向かう人を観察して、あの人はどんなビジネスをしているのだろうか、もしくは会社の仕事の残りをカフェに持ち込んでいるだけなのだろうかと考えてみる。課題に取り組む学生がいれば、学生だって大変だよな、なんて同情してみたり、ひたすら暇をつぶしていそうな女性がいれば、友達か恋人との待ち合わせなのだろうか、と推測したりする。それぞれの時間が交差する空間。特に、お互いが何を知らなくてもいい。ただ、そこに居合わせたという偶然だけで成り立っている。

私は9割方1人でカフェに行くと言及したが、残りの1割は誰かと一緒に行く。思い返すとノスタルジックな気分になるが、あの人とあんな話したな、とか、あの時は今こんな人生を歩んでいるなんて思ってもみなかったな、とか、過去を振り返って思う。きっとこれからも、カフェで私の人生は刻まれていくのだろう。どうしても、ふらっと立ち寄ってしまう。やはり、あの空間が好きでたまらない。

至福の昼食

時刻 12 時、いつものように私は眉間にしわを寄せる。「またこんなに・・・」私の視線はお昼休みを迎えた学食の学生たちに向けられていた。私は平日のお昼を一人で過ごしたい。ただしそれは、決して私が友人を疎ましく思っているからではない。純粹に私は、授業に忙しく明け暮れる平日唯一の休息を、誰の邪魔もされることなく有効に利用したいからだ。学食に響き渡る話声と行き交う学生のなか、私はただ一人立ち尽くした。それはまるでスクランブル交差点の行き交う群衆のなか、一人孤独に空虚な空を見つめているようだ。そして私は自分の居場所を求めるかの如く、おもむろに自転車をこぎはじめる。正門に向かって一目散にこぎ続ける私は、通り過ぎる生協へ向かう学生など見向きもしない。ただひたすら、誰の邪魔もされることがない居場所を求めて私はペダルを強く踏みつけた。

額に大粒の汗をかきながら、私は両手いっぱいブレーキを握りしめた。ふと顔を上げると、私は自宅アパートの正面にいた。平日の昼下がり、住人は学校や仕事に出かけ、私のアパートはもぬけの殻のようだ。静かに佇むアパートを前に、私はそっと目を閉じて深呼吸した。この場所こそ、私の求めるささやかな昼食会場である。先ほどまでの曇った表情は嘘のように消え、私は自分の部屋へ向かって足早に階段をかけ上がる。扉を開けると、整理整頓された部屋の全体像を見つめ、私の表情はほころんだ。背中にかかる重いリュックを床に落とし、私はほっと胸をなでおろした。汗で背中に張り付いたTシャツを仰ぎながら、私は冷蔵庫を覗き見る。「早く何か食べなければ。」私はお昼の時間が刻々と無くなりつつある現実気付く。手早く料理を作り、私は空腹を満たすために口いっぱいに昼食をかきこんだ。ついに昼食を始めることができたことを実感し、私は幸福感に包まれるのである。

昼食を食べ終え私が静かに箸を置くと、部屋が水を打ったような静けさを取り戻した。前夜のアルバイトでの苦労や、午前の授業内容を回想しながら私は静かに目を瞑る。私にとって、忙しい苦学生の生活を支える一番の楽しみなのである。しばらく目を瞑り続けると、何かに奮い立たされるかの如く時計に目をやる。「午後の授業に行くか。」小さな声で囁くようにつぶやくと、私は重い身体を奮い立たせ、重いリュックを背負った。私のお昼休みは終了を迎えたのである。しかし、このたった 30 分前後の休憩は、私にとってゆっくりと時が流れているように感じ、他の誰にも負けない日常に存在する余暇なのであると考えている。

余暇についてじっくりと私の生活を振り返ると、どうやらごく普通の日常の一部に大きな幸福があるようだ。私は贅沢な食事や旅行、あるいはお金を使うことだけが余暇の全てではないと考える。昼食という一見平凡な時間を、私は日々の多忙な生活環境と苦しくも楽しもうと試みる精神のおかげで素敵な余暇であるを見出すことができた。IT 技術の発達により私たちの生活は大量の情報によって豊かになった。一方で大量の情報によって私たちは過度に多忙になり、ささやかな幸福すら見落としているのではないだろうか。最後に、私の余暇は昼食という素朴ながらも素敵な生活の一部である。余暇政策論を通じて、昼食に限らず、そのような素敵な日常の余暇を私は大切にしていかなければならないと感じた。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出7本!!

合気道は楽しい余暇になりうるのか

私の余暇は合気道だ。大学に入って何か始めようと思い合気道を選んだ。姉が少林寺拳法を習っており、兄弟喧嘩をするとすぐに手や足が出るのだ。彼女の攻撃力が非常に高いので、自分の防御力を上げようと思った。この大学には武道系サークルは様々あるが、その中でも特に初心者が多そうな所を選んだ。そこがたまたま合気道部だったのだ。しかし思いの外合気道はきついもので、運動を全くしてこなかった運動音痴にはかなりハードルが高い。初心者でも大丈夫、60歳になってから始める人もいる、という売り文句は間違いではない。しかし今までの合気道部員は運動経験者ばかりで、伝統として出来上がった練習メニューが求めるレベルに達することができない。師範たちが言うには、「本当に思い通りに体を動かせるのは大学生の内だけ」らしい。高校生でもなく、大学生らしい。合気道は少々精神的な練習や、人体の構造を理解した上で動かなくてはならない部分がある。これらを理解できる年齢で、一番体力と時間があるのが、大学生、ということだ。どうせ体力や筋力は落ちるのだから、できる内にした方が良く、と指導されてきた歴代の先輩方は、その教え通りに汗がボタボタと流れ落ち、畳に染み込むような練習メニューを作ってきたのである。

しかし私と言えば全く運動ができない状態から始めたものだから、本当についていけないことが多々あった。例えば5月に行った強化練習でランニングをする事になったのだが、大学から鬼怒川まで約4キロの道のりを40分ほどかけて走った。歩いた方が圧倒的に早い。他のメンバーといえば中学高校時代の運動部仕込みできつさと走っていくのだ。スタートして5分で背中が見えなくなった。先にゴールしていた先輩が「迷子になったのでは」と探しに来たほどだ。次につらかったことと言えば夏合宿で、私はあの夏人生で初めて「一分一秒でも惜しい」と思った。朝起きて走って、朝食を食べれば午前練、昼食を食べて午後練、休憩して夕方練、夕飯を食べて夜練である。疲れ切ってしまうくらい寝ても寝足りない、疲れが取れない、日に日に疲労が溜まって行って、徐々に体が動かなくなっていくのがわかるのだ。たった40分の休憩でさえ、睡眠時間として使っていた。他にも、慶応大学との合同合宿で、「ベルトコンベア」というおぞましい数練習もした。決まった数など存在せず、時間が来るまで只管続けるのだ。勿論具合が悪ければ休んでも良いが、具合が良くなれば戻らなければならない。よく戦争映画や小説なんかで、怪我をした軍人を治療するのに、また戦場へ行ってしまう、なんてシーンがあるが、まさしくこれである。終わりが無い戦争に参加する兵隊の気分だった。先が見えない絶望と度重なる投げ受け交替、短い間隔でパートナーを変えるため、相手の癖に「慣れる」ことなくまた新たに気を張って怪我をしないように細心の注意を払わなくてはならない。

合気道を始めてなんやかんやと1年以上が経ってしまった。正直信じがたいが事実である。身体的にも精神的にもつらいことしか無い為、年度末の部活の文集に「部活を楽しいと思えなくても良いから、達成感を味わえるようになりたい」と書いた。その甲斐あってか、最近は何だか達成感を味わえるようになったのだ。幸いなことに、毎年部員難の我が部に10人もの新入生がやって来て、現役より1年生の方が多くて面倒が見切れないのだが、それもスパイスだったのかもしれない。これをそのまま続けて、いつかは「余暇」を費やして良かったと思えるものにしたい。